

わたしの原風景

6

あさのあつこ

作家



イラスト／石川えりこ

わたしは山間の温泉町に生まれ育った。その町の近くに、今も住んでいるのだけれど、自分の書く物の原点にはいつも、この町がある。今の、ではなく、今から十年前、わたしが子どもとして中学生として高校生として暮らしていた町だ。

猥雑なところだった。昔ながらの温泉街があり、そこには何軒ものヌード劇場やら飲み屋やらが建ち並び、週末ともなると酔客の放歌や乱れた下駄の音が響いた。祖母が小さな食堂を営んでいたものだから、忙しいとよく駆り出された。手伝った際に祖母はながしかの小遣いをくれたから、ちょっとしたバイトでもあったのだが。

バイト代はもちろん魅力的ではあったが、店にやってくる人々はそれ以上におもしろく、惹きつけられたりもしたものだ。

近くのヌード劇場専属のダンサーは、もうおばさんといえる年齢だった。皺が目立ち、身体も緩んでいた。たいていは化粧気なしのすっぴんだったが、一度、怖いほどの厚化粧でやってきたことがある。太いアイラインに付け睫毛、真っ赤な唇と頬。来訪神みたいだった。祖母に「○○さん、でえら化粧じゃな」と言ったら、真顔で「あの人はプロじゃから、舞台で何がどう映えるかようわかっとなるんよ。余計なこと言いなさんな」と叱られた。

また、お客さんの中に年に二、三度やってきて、必ずオムライスを注文する年配の男の人がいた。その人の半袖からのぞいた腕に、青い蔓草模様が覗いていて仰天した。わたしはまだ小学生で、穏やかな顔立ちの老人と刺青を結びつけるどんな経験もなかったのだ。

祖母は「あのお爺さん、ヤクザなん」と問う孫娘を軽く睨み、「どういいう人でもお客さまじゃる。あれこれうるさく言わんの」と戒めた。老人はおそらく堅気に戻っていたのだろう。そして、祖母はそのことを知っていた。確かめる術はないが信じている。○○さんも老人もおもしろい。人の深さを教えてくれた。祖母の生き方と食堂は今でも、物書きとしてのわたしの糧になっている。